



疾病痕

人骨群のうちに、病気が窺われる人骨がいくつか確認されています。弥生時代の人々がどのような病気にかかっていたのかを知ることができる貴重な症例です。

頭蓋骨縫合早期癒合症

頭蓋骨の縫合（骨のつなぎ目）は、通常、成長とともに徐々に閉じていくものですが、縫合の一部が早期に閉じてしまい、頭に変形が起こる病気です。当遺跡例では前後に走る縫合が早期に閉じてしまったため、頭が前後に長くなっています。

変形性関節炎

膝関節に炎症が生じ、関節面の周囲に骨が増殖するものです。

外耳道骨腫

潜水などにより耳に水圧や寒冷刺激がかかることによって、外耳道（耳の入口付近）の骨が隆起するものです。潜水漁を盛んにおこなっていた青谷上寺地遺跡の海人ならではの症例といえます。

骨折

手をついたため起こったと思われる骨折の症例が確認されています。その後も骨折部分の周囲に骨が形成され、変形はあるものの完全に治癒しています。

眼窩篩（クリブラ・オルビタリア）

貧血により眼球の入るくぼみの壁に細かな小孔が生じる症例が確認されています。

エナメル質形成不全

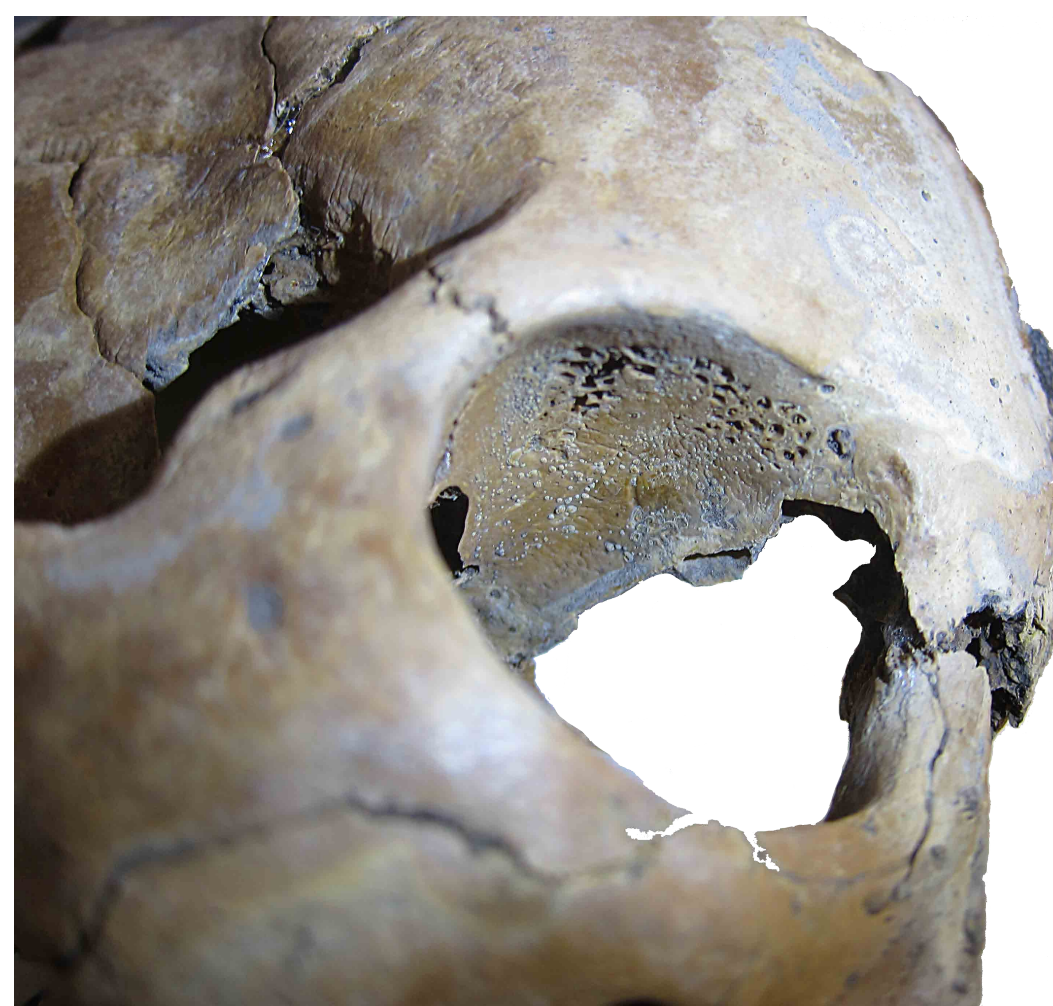
子供のころの健康状態は、歯の表面のエナメル質に現れます。歯の形成時期に栄養不良であったり、病気にかかったりすると、歯の表面に横じまが入り、成人になっても残ります。青谷上寺地遺跡の人骨群中に高頻度に観察されます。

結核

日本で最も古い結核の症例が2点見つかっています。結核菌が椎骨（背骨）に病巣を作り、病気が進行すると脊柱が曲がり、背中が丸くなる脊椎カリエスという症例です。弥生時代に日本に結核がもたらされたことを示す事例です。



外耳道骨腫の症例



眼窩篩の症例
(クリブラ・オルビタリア)



脊椎カリエスの症例